〔山東庵一夕話附録〕濃紫煙盒

黒柿に蒔繪銀具○略圖

〔閑田次筆四〕ある所にて、烟草の箱に書付たるを見しに、手拈姑娜千年草、口吐蓬萊五色雲、何人の一聯にや、詠物にて前後ありやいなちず、一興に付すべし、

〔薩州府志六土産〕多波古○略中　近世本朝之流風、而家々有來賓、則寒暄談未了中、先出烟草、盛是於筥、理火於銅鐵器或磁器、是稱火入、并棄所吸之渣滓灰燼器、并火入等之物、居方盆或圓盤、是謂多波古盆、

〔煙草考〕烟盤

大小長短不同、有方者、有圓者、有提者、有四輪者、有卑者、形容不一、或素質、或曲輪、堆朱、螺鈿、蒔繪、梨地、唐金、朱黒漆等、各從所好造焉、　出攝州有馬者、皆以竹製之、出駿州府中者、多提盤、

〔目ざまし草〕考證雑話

芬盤（たばこぼん）といふものは、ある説に、志野家の人、某の侯と謀て、香具を取あはせて用ひしとなり、盆は即ち香盆、火入は香爐、唾壺は粧爐壺、煙包は銀葉匣、盆の前に、煙管を二本おくは、香箸のかはりなりとぞ、後々に至り、今の書院たばこ盆といふ樣の物出來ると也、大人○大槻盤水　往年長崎に遊學（ものまなび）給ひし時、土俗たばこ盆の事をかうぼんといひ、老婦女などは、客來れば、かうぼん持てわたいといふ、わたいとは、渡れといふ事にて、持て來のこゝろと聞ゆ、かうぼんは、たばこ盆を促（ちぢめ）呼と覺ゆと冷笑せしに、かうぼんは、即ち香盆にして、昔の辭の、西鄙には今に殘りし事と思知たり、香盆の事、往年間氏に聞

〔貞丈雑記七膳部〕一たばこ盆と云物、京都將軍○足利氏の時代にはなかりし也、寛永年中、南蠻國より渡りしと也、それ故舊記に煙草盆の事なし、今の世のならはしにて、貴人の御前にては、たばこを吸